

# 流山市三輪野山貝塚における <sup>14</sup>C年代測定研究

<sup>14</sup>C Dating Research Related to  
the Miwanoyama Shell Midden in Nagareyama City

小林謙一・坂本稔・新免歳靖・尾崎大真  
村本周三・小栗信一郎・小川勝和

KOBAYASHI Ken'ichi, SAKAMOTO Minoru, SHINMEN Toshiyasu, OZAKI Hiromasa,  
MURAMOTO Shuzou, OGURI Shin'ichiro and OGAWA Katsuyoshi

①はじめに

②測定試料

③炭化物の処理と測定および曆年較正

④考察

⑤まとめ

【論文要旨】

流山市三輪野山貝塚出土土器付着物及び炭化材の<sup>14</sup>C年代測定を行い、縄紋遺跡の形成過程の年代的復元を試みた。三輪野山貝塚は、縄紋時代後晩期の貝塚をもつ集落遺跡であるが、集落中央を人為的に掘り下げ、その掘削土を廃土として集落周辺の斜面に廃棄する、「盛土状」とされる遺構が検出されている。その人為堆積層には、多量の土器廃棄層や、黒色腐植土の特殊な堆積層など、長期にわたる人為的な営為の跡が残されている。これらに対し、層出土炭化材の年代測定によって、層位の形成過程に対する年代的復元を試みた。その結果、堆積層下層は堀之内1式土器が主体的に出土し、年代的にも後期前葉にまとまる。堆積層中位の黒色土層には、加曾利B式～曾谷式を中心とした土器が廃棄されているが、炭化物の年代は縄紋中期から後期の多様な年代を示し、人為的作為が加えられている可能性もある。堆積層上層は、後期後葉の年代が集中的に測定された。これにより、斜面の堆積層は、1000年近い長期の間に、その間に断絶時期を挟みながら、層の形成がなされたと考えられる。また集落では、後期中頃に大きな人為的営為（集落中央部の掘り下げ工事に對応する可能性がある）が行われた可能性が示唆される。

盛土状遺構とされる斜面部の人為堆積層では、層位ごとに測定した炭化材の年代から見て、下層部分は堀之内1式、中位の黒色土部分は、後期後半曾谷式を主体としながらも縄紋中期に相当する年代まで含む。やや分散した測定結果が得られた。測定結果で見ると、上層については、較正年代で2300-2000 cal BCころと後期前葉の年代が得られた。中位の黒色土からは、較正年代では1550-1450 cal BCころを中心とした年代が推定された。

以上のように、人為的堆積の下層は、堀之内1式期の集中的な堆積、中位の黒色土は、曾谷式期ころに集落部の削切部分からの廃土などが古い時期の炭化材を巻き込みながら堆積した層、上層はその後に時間をかけて自然堆積的に、または集落の営みに合わせて人為的に堆積したものと想定できる。